

ゼロのルイズが呼び出したのは、一人の少女だった。  
緑の美しい髪と、赤い瞳が印象的な彼女は、嘲笑を投げかける観衆を一睨みで黙らせると、それがさも当然というように、目の前のルイズの唇を奪った。  
少女の名を、アセルスという。  
またの名を、魅惑の君。

その日、ルイズは初めての恋に落ちた。

夕暮れの太陽が、部屋の中にある何もかもを赤く染めていた。  
事情を説明するために案内されたルイズの私室の中で、二人は寝台の縁に並んで座っている。

「なるほど、私は君の使い魔ということか」

その声に不快の気配は無い。  
左手に刻まれたルーンを、むしろ楽しげに眺めながらアセルスは呟く。

「あの……お嫌でしたか？」

恐る恐る、といった様子で、ルイズが尋ねる。  
喧嘩友達のキュルケが聞いたら、耳を疑うような弱弱しい声音。  
そこに透けて見えるのは、この人にだけは絶対に嫌われたくないという想い。

「ああ、いや、退屈しのぎにはちょうど良い。  
ジーナには悪い気がするけど、土産話で我慢してもらおう事にするさ」

くつくつと、それがさも楽しい事のように笑う。  
笑うと、外見相応の幼さが貌に現れる。  
そのさまに見惚れるルイズ。  
もしかすると、と思う。  
もしかすると、この異世界から来たというあまりにも美しい貴人は、自分と同じくらいの年齢なのかもしれない。  
しかし、次の瞬間、ルイズを射抜いた眼差しが、その印象を裏切る。  
最高級の紅玉を融かして流し込んだような紅の瞳が、春の日の残光とともに、ルイズの魂をも引き込んでいく。  
息が苦しい、部屋の中から、それだけで光が奪われていくようだ。  
とくとくと、小さな心臓が刻む鼓動が、ルイズの全身を震わせる。  
ルイズは、ある種の確信をもって、アセルスの花唇が紡ぐ言葉を待っている。

「で、仕えるからには勿論対価が貰えると思っていいんだね？」

腕を掴まれる。

「え？」

そのまま寝台に倒れこむ。

「私は安くないよ？」

精々、楽しませてよ、と言って、アセルスの唇がルイズの口を塞いだ。  
驚愕に見開かれたルイズの瞳がゆっくりと閉じる。

窓の外の夕陽は、今にも沈もうとしていた。

やがて、僅かな歳月の後に、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールという少女が地上から姿を消し、  
針の城に君臨するかの妖魔の君は、また一人寵妃を得ることとなった。  
これは要するに、ただそれだけの話。  
初恋が、永遠となった、一人の少女の物語。